

# 自己教育力を高める「実習ポートフォリオ」の開発 —学生と教員の協働によるアクション・リサーチ—

江崎ひろみ, 窪田 志穂, 宮宇地秀代, 荒巻 葉月, 神野 藍梨, 福島 里奈,  
宮本 翔平, 政岡 敦子, 田中美延里, 野本百合子, 野村美千江



## 自己教育力を高める「実習ポートフォリオ」の開発 －学生と教員の協働によるアクション・リサーチ－

江崎ひろみ\*, 窪田 志穂\*, 宮宇地秀代\*, 荒巻 葉月\*\*, 神野 藍梨\*\*, 福島 里奈\*\*,  
宮本 翔平\*\*, 政岡 敦子\*\*\*, 田中美延里\*, 野本百合子\*, 野村美千江\*

### Report on the Introduction of the Portfolio to Cultivate Self-education Ability in Nursing Practice －Action Research from the Collaboration between Students and Faculty－

Hiromi EZAKI, Shiho KUBOTA, Hideyo MIYAUCHI, Haduki ARAMAKI, Airi JINNO,  
Rina FUKUSHIMA, Shouhei MIYAMOTO, Atsuko MASAOKA, Minori TANAKA,  
Yuriko NOMOTO, Michie NOMURA

Key words: 実習ポートフォリオ, 自己教育力, 看護実践能力, 学生と教員の協働, アクション・リサーチ

#### 序 文

ポートフォリオは、約10年前から臨床における問題解決能力や自己教育力の育成に主眼を置いた看護学教育に導入され<sup>1-5)</sup>、有効活用されている。看護学実習におけるポートフォリオ(「実習ポートフォリオ」,以下、「実習PF」とする)とは、学生自身が学習や実習を始める前に目標を設定し、学生が体験した事象および体験を通して感じたこと、考えたこと、調べたこと、指導者からの助言等を記録し、実習記録・実習日誌・実習レポート・実習評価表等の形で作成され集積された記録物<sup>1,2)</sup>である。鈴木は、看護学実習を終え、その全体を振り返り俯瞰してはじめて価値あることに気づくといひ、このとき実習での学習の軌跡が見える「実習PF」が役立つとしている<sup>3)</sup>。本学においても、学生が「実習PF」を主体的に活用することにより学習へのモチベーションを高め、自己教育力を醸成することに役立てたいと考え、その試作・導入の試みに着手した。

看護系大学学士課程教育においては、文部科学省より2002年に「大学における看護実践能力の育成の充実に向けて 看護学教育の在り方に関する検討会報告」<sup>6)</sup>、次いで2013年には「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」の答申<sup>7)</sup>が示され、学生の自己教育力の育成ならびに看護実践能力の到達目標に向けて様々

な取り組みが報告されている<sup>5,8,9)</sup>。服部ら<sup>9)</sup>は、独自に開発した「看護教育におけるポートフォリオ自己成長のための学習評価」を用いて、学士2年次までに養われた看護実践能力の実態と自己教育力の特徴を調査した結果、自己教育力が高まるほど看護実践能力の獲得が高まると示唆している。本学も、「看護技術卒業時到達目標」<sup>10)</sup>を設定し、卒業時までに2回の自己評価が可能なシートを作成した。しかしながら、開発したシートは、学生だけでなく教員にも有効に活用されていない現状があり、改善する必要があると考えられた。

そこで今年度、看護実践能力の卒業時到達度評価として用いていた『看護技術卒業時到達目標』シートについて、継続して活用できるよう改善し「実習PF」に組み込もうと考えた。使用する学生の意見を反映させることが効果的と考え、学生と教員の協働によるアクション・リサーチ<sup>11)</sup>を通して「実習PF」の開発に取り組むこととした。アクション・リサーチ<sup>11)</sup>とは、ある事柄の改善へ向けた一連の組織的・体系的な取り組み(サイクル過程)であり、近年、教育活動において授業や教材を改善するために広く用いられている方法論である。この方法論は、教員が自ら、①焦点化すべき課題を確定し、②データを集め、③分析し解釈を深め、④次に何をなすべきか計画を立てることに関与するものである。

\*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

\*\*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科4年生

\*\*\*愛媛県立医療技術大学

以上を前提とする本研究の目的は、本学の全ての看護学実習を通じて獲得した看護実践能力を、学生自身で可視化し、自己教育力の向上に資するツールとしての「実習PF」を学生と教員が協働で開発することである。

## 用語の定義

**自己教育力**：1983年文部科学省中央教育審議会において、自己教育力の用語が初めて用いられ「主体的に、学ぶ意思、態度、能力」と定義され、自己教育力とは学習への意欲であり、学習の仕方の習得であり、生き方の問題にかかわるものであるとしている<sup>12)</sup>。

**ポートフォリオ (Portfolio)**：ロンドン大学のS.クラークらが開発した総合的学習の評価方法であり、自分で学習目標を設定し、その目標に到達するまでのプロセスで学んだものを学習成果物として、目的・計画的に長期にわたって蓄積し、それを評価に活用するものである<sup>13-15)</sup>。ポートフォリオには、テーマポートフォリオとパーソナルポートフォリオの2種類がある。前者は、目的あるテーマへ向かうプロセスで手に入る資料や情報を一元化したもの<sup>2,3)</sup>である。後者は、その人の仕事や活動、その成果などをファイルにしたものであり、専門職としての成長記録として自分のそれまでの経験を再評価し、意味づけし、経験から得たものを自分の中で確固たるものにしていくうえで役立つもの<sup>2,3)</sup>であり、今回開発を目指す「実習PF」は、両者の融合を目指す。

## 研究方法

研究デザインは、学生と教員の協働によるアクション・リサーチである。

研究期間：平成28年6月から9月。

研究方法：

### 1. プロジェクトチームの結成

学生4名（「実習PF」開発の目的と意義に賛同した看護学科4年生）、教員7名（教育活動の改善に関心がある助教ら4名、学科長、基礎看護学教授、人材育成の専門家）によって構成された。

### 2. 学生が求める「実習PF」についての情報収集

#### 1) データ収集

領域別実習をすべて終えた学生のうち本研究に賛同を得られた看護学科4年生12名（男4名、女8名）を対象とし、4名×3回のフォーカス・グループ・インタビューをそれぞれ1時間程度実施した。対象学生のリクルートおよびインタビューはプロジェクトチームの学生が実施し、インタビュー前に、「実習PF」とは実習体験で得た学

びや経験が含まれた記録や成果物などを一つにまとめたものであることを説明した。半構造化したインタビューガイドを用いて、①現行の『看護技術卒業時到達目標』シートの理解度と活用状況、②我々の目指す「実習PF」に対する意見とそれに対する要望、③教員との共有や記録の負担について、意見を収集した。

#### 2) データ分析

インタビューの録音内容は逐語録に起こし、意味のあるセンテンスに区切ったものを類似性で分類・整理し、カテゴリー化した。発言者は匿名化したが生別による違いを残すため性別をデータコードに付記した。分析の視点は、①現行の『看護技術卒業時到達目標』シートに対する認識と課題、②学生が求める「実習PF」とその活用である。

#### 3) 倫理的配慮

グループインタビューに参加する学生に対し、研究の趣旨と方法、調査への協力は自由意思であり、成績などへの影響はないこと、インタビューでの発言内容は研究以外に使用しないこと、参加後の意見撤回が自由であること、発言者の匿名性は保持されることなどについて口頭で説明し、同意を得た。

## 3. 研究会議の開催

7回の会議では、文献その他の情報収集・分析、学生インタビュー結果を基に課題の明確化、「実習PF」のキーワード・構成要素の検討、構造と内容の検討、試作品の作成と改善、活用ガイドの作成を行った。プロジェクトチームの学生に対する倫理的配慮として、会議は、学生の馴染みのある図書館グループ研究室で開催し、欠席しても成績等に影響はないことを伝えた。会議において、学生と教員は対等に意見を述べ合うことを心がけ、一方に偏らないよう討議を重ねた。

## 結 果

### 1. 課題の明確化

現行の『看護技術卒業時到達目標』シートに関して、全ての領域実習を終えた4年生へのグループインタビューの結果を表1に示した。必要性や評価時期がわからないため評価のやる気が起きず、評価基準や文章がわかりにくいため評価しづらい。また、技術項目と実習で経験できる内容や到達度が合致していない、男子学生の技術学習への配慮不足などの意見があった。以上のことから、学生は現行の『看護技術卒業時到達目標』シートを評価しづらいと感じており、技術到達度や看護実践能力の自己評価に役立てられていない実態が明らかになった。

この結果を基にプロジェクト会議で協議した結果、学生が『看護技術卒業時到達目標』シートの目的や活用方

表1 看護実践力シート・技術チェックに対する意見の集約

◎男女共通、●女子、○男子

目的・必要性・評価時期に関すること	必要性が分からない	◎必要性が分からない ◎各領域の（技術）評価とは別物なのか ●評価することで、未達成項目が分かる
	評価時期が分からない	◎評価をいつするのか分からない ◎中間とはいつを指すのか分からない ◎評価の時期を明確にしてほしい ・分かっているならば、評価する ○実習の間の長期休暇後または演習がすべて終了した時点を実習評価の時期にしてはどうか ○総合実習前に確認するよう指導された
	評価する気が起きない	●最後にまとめて提出ということがしんどい ●時間が経つと達成できたか忘れて評価できない ●看護実践能力シートの文字が小さく、項目が多いため、評価する気がなくなる ◎評価しないといけないと思っていたが評価していない ◎覚えていなかった
評価基準や評価の方法に関すること	文章がわかりにくい	◎看護実践能力シートの文章が分かりにくい ●技術チェック表の文章は分かりやすい
	評価しづらい	◎どう評価するのか分からない ●評価基準の共通認識ができていない ●評価基準の「経験する」「見学のみで良い」の違いが分からない ●技術項目の「わかる」「理解する」の基準が分からない ●看護実践能力シートのグラフ化の仕方が分からない ○技術チェック表・看護実践能力シートをチェックするだけで評価できるようにしてほしい ●技術チェック表の技術項目を実習ですること、演習ですること、見学をみの3つに分けてそれぞれで、評価項目をつくってほしい
技術項目到達度と実習場で経験できる技術との整合性について	到達目標が合っていない	●実習では実施できないことの到達目標が高く設定されている (例：車いす移送、血糖測定) ●受け持ち患者、実習先によって経験できる技術が異なる (例：義歯の手入れ) ●評価基準に「受け持っていない・経験する機会がなかった」などを追加してほしい
	技術項目が合っていない	●学生が実習で実施してはいけないことが技術項目として挙げられている（例：摘便） ◎経験できないようなことが技術項目として挙げられている (例：検体の管理、災害時の行動、終末期看護、ギブス固定)
	男子学生の技術学習への配慮が足りない	○異性モデルでの技術学習が行われていない ○実習で異性の入浴介助に入らざるを得ない場面があり、申し訳なさを感じた

法を十分に理解できていないだけでなく、評価が困難であると感じることにより、継続して活用できておらず、教員間でも活用方法を統一できていないため、学生に必要性を伝えられていない現状を示した。また、到達目標や評価時期に関する意見に加え、技術の細目が複雑であることが評価の困難さに繋がるという意見があった。これらのことは、シートの複雑さによる問題だけでなく、教員がその目的や趣旨を十分に理解していないため説明が不十分であることを示しており、主体的な学習ツールとして継続して活用するためには、シートの改善とともに、目的や必要性の共通理解、活用方法周知への工夫が必要であることが明らかとなった。看護実践能力・技術チェックシートの改善点としては、目的と評価時期が明確で評価基準や方法が分かりやすく、評価する技術項目

や到達目標が実習の実際と合っているものとした。

## 2. 「実習PF」についての情報収集

4年生へのグループインタビューから「実習PF」への意見集約を表2に示した。

学生にとって望ましい「実習PF」は、実習指導者からの学びや成果物を残すことができるもの、ビジョン・ゴールシート<sup>3)</sup>は自分の成長を評価でき修正できるもの、記録の負担は少なく、書きたくなる素材様式で、将来的に電子化も検討するなどの意見が得られた。また、「実習PF」が活かせるかどうかは、その目的や意義を理解できること、客観的に自分の成長がわかる教員のコメントなど教員から適切なサポートが得られること、教員や指導者との共有の仕方を自分たちで判断できることが明らか

表2 どのような「実習PF」であると良いかの意見集約

◎男女共通、●女子、○男子

「実習PF」の目的や意義を理解できる	「実習PF」を活かせるかどうかは理解度による	<ul style="list-style-type: none"> <li>●「実習PF」を活かせるかどうかは、その人の「実習PF」への理解度による</li> <li>●「実習PF」の意義が分からない</li> <li>●自ら「実習PF」を作成しようという気持ちにはならない</li> <li>●どう使用するのか分からない状態では、やる気が出てこない</li> <li>●導入前のプレゼンテーションをしっかりとっておかないと、やらなくなる</li> <li>◎学生自身が実習での学びや考えを自由にまとめられて良い</li> </ul>
	目的を明確にし、イメージが湧きやすくすると良い	<ul style="list-style-type: none"> <li>●見本があるとイメージが湧きやすい</li> <li>●講義で「実習PF」について触れる</li> <li>●「実習PF」や技術チェック表の目的を明確にする</li> </ul>
実習指導者からの学びや成果物を残すことができる	実習でフィードバックしてもらったこと、印象に残ったこと、成果物などを残しておきたい	<ul style="list-style-type: none"> <li>●看護師さんからフィードバックしてもらったことを残したい</li> <li>●良い看護師さんの行動や嫌だと思ったことを残しておきたい</li> <li>◎写真の効果は人それぞれ</li> <li>○写真を学校側が撮ってくれるなら挟みたい</li> <li>●各実習のメンバーが違うので写真を撮って貼るのは楽しい</li> <li>●成果物を保存できるポケットが欲しい</li> </ul>
ビジョン・ゴールシートは自分の成長を評価でき、それに合わせて修正できるものである	自分の成長に合わせてビジョンとゴールを設定する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●自分の長期的な目標を掲げられて良い</li> <li>◎実習前だと目標を上手く立てられないのではないかと</li> <li>●目標は看護技術に関してなのか個人的な成長に関してなのか、人によると思う</li> <li>●ビジョンだけなら1年時でも書きやすいのではないかと</li> <li>○1年の時にビジョンを立てるのは難しいのではないかと</li> <li>●大きなゴールは描きにくい</li> <li>●いつまでも評価できないのはモチベーションの低下につながる</li> <li>◎1年ごとに目標やビジョンは変わる</li> <li>○1年ごとに書き換えてはどうか(2・3・4年)</li> <li>●枠を大きくして、随時追加・修正していけるようにしたら良いのではないかと</li> </ul>
教員の適切なサポートが得られる	ビジョン・ゴールへの助言や成長コメントを教員に求める	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎教員コメントを貰いたい(客観的に自分の成長がわかる)</li> <li>○成長の記録を教員同士で共有してほしい</li> <li>○成長の記録を実習指導に役立ててほしい</li> <li>●希望者は、ビジョン・ゴールシートを教員と一緒に考え、修正していく</li> </ul>
教員・指導者との共有の仕方を自分たちで判断できる	全て提出するのは負担になる	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎提出するとなると義務になり負担感が出てくる</li> <li>◎全部見せると本心がみえなくなり、「実習PF」の目的と合わない</li> <li>○成長記録より技術チェック表のほうが見せたくない</li> <li>●チェック表は自分で見返すことはないので提出して良い</li> <li>●ビジョン・ゴールシートなどは自分で教員に見せるかどうか決めるほうが良い</li> </ul>
	見せる機会があった方が良い	<ul style="list-style-type: none"> <li>●実習前の自己紹介用紙を書くなら「実習PF」を見せた方が良い</li> <li>◎見せる機会がないとやらない人はやらない</li> </ul>
将来的に電子化も検討する	パソコンで「実習PF」を記録したい	<ul style="list-style-type: none"> <li>○電子化にしてほしい</li> <li>○無くさずいつでも見られるようにしてほしい</li> <li>○学校のパソコンの学年フォルダに保存し、いつでも書き込めるようにしてほしい</li> <li>○チェック表にチェックを入れるだけで自動計算されるシステムがほしい</li> <li>○卒業時にコピーし、冊子にすれば良いのではないかと</li> </ul>
書きたくなる素材様式である	手軽に書けて、個々人に合った様式、丈夫な素材であると、書きたくなる	<ul style="list-style-type: none"> <li>○成長の記録を書くことで後に振り返りやすくなる</li> <li>●自分の趣味に合ったデザインなら書きたくなる</li> <li>●日記のように手軽にできると良い</li> <li>●様式の好き嫌いがあると思うのでいろんな様式の紙を入れておく</li> <li>●「実習PF」の見本があったら書きやすい</li> <li>◎ファイルも紙もしっかりした素材が良い(プラスチックリングファイル・穴が広がって破けず、くたくたにならない紙)</li> <li>●教員に見せなくて良い記録用紙が欲しい</li> </ul>
記録の負担が少ない	「実習PF」の記録の負担を少なくする	<ul style="list-style-type: none"> <li>●その都度思ったことを付箋やメモに残し、「実習PF」に貼っていくようにしたい</li> <li>●成長の記録は各実習でのまとめをコピーして挟むので良いのではないかと</li> <li>◎成長の記録は書くスペースが小さければ書く気が起る</li> <li>●成長の記録は自分のペースで書くのならば負担にならない</li> <li>●成長の記録が提出だと負担に感じる</li> </ul>
	実習時間内に記録の時間を確保する	<ul style="list-style-type: none"> <li>●記録の時間はあったほうが良い。(実習後・実習前のどちらか)</li> <li>●各実習で「実習PF」を使ったほうが「実習PF」の存在を忘れない</li> </ul>

になった。

この結果を基にプロジェクト会議で協議した結果、望ましい「実習PF」は学生が実習体験を振り返りつつ、自己の成長を実感し、楽しんで自ら活用できることで実習意欲の向上と持続に役立つものであると意見が一致した。

具体的な活用方法に向けては、「実習PF」の目的を明確に理解できるよう説明が必要であること、「実習PF」を言葉だけでイメージすることは難しく、写真や実際の記入例が必要であることの2点が指摘された。また、教員との共有に関しては、学生によって共有したい内容が異なっているため、可能な限り学生自身が共有の方法を選択できるようにした方が良いとの意見が出た。これらの意見交換から、学生が「書きたくなる」、「続けたくなる」、「私の宝物」となることが、「実習PF」の重要な構成要素であることが明らかになった。「書きたくなる」、「続けたくなる」には、書くことが楽しい素材と様式、シートの自由度が高い、記録の負担がないことが挙げられた。また、「私の宝物となる」には、自分の「実習PF」に価値を感じる、他にはないもの、個別性の高いものであり、それゆえに共有することの制限を設ける必要性も検討された。つまり「私の宝物」となる「実習PF」は、学生個々の経験や学びを自由に表現できるシートや他にはない成果物を集めたもので、教員や指導者との共有方法を学生が判断でき、教員の適切なサポートを得ながら主体的に活用できるものを作成することとした。

### 3. 「実習PF」の構造図（図1）

望ましい「実習PF」は学生が実習体験を振り返りつつ、自己の成長を実感し、楽しんで自ら活用できることで実習意欲の向上・持続に役立つものであるという検討結果から、軸となるキーワードを抽出し、構造化を試みた。その結果、【モチベーション】と【実習の振り返り】を横軸に、【成長の実感】と【思い出・私の宝物】を縦軸

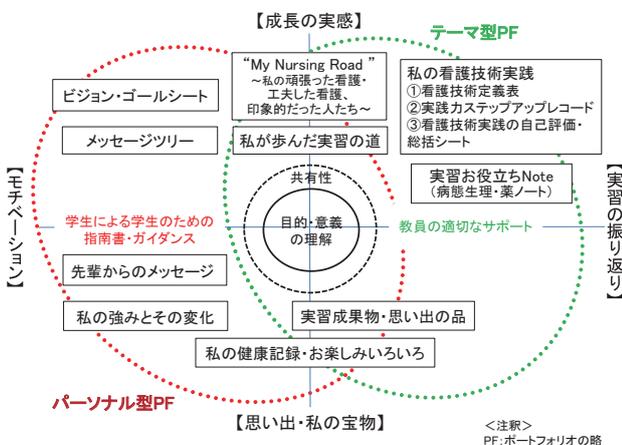


図1 実習ポートフォリオ「医技Diary～私の成長記録～」の構造図

に置く構造図とした。「実習PF」が主体的な学習ツールとなるためには、シートの改善とともに、目的や必要性の共通理解が重要であることから、「目的・意義の理解」を軸の交差する中心に置いた。さらに、継続して活用するためには、教員や指導者との共有方法を学生が判断できることが重要であることから「共有性」をその外円とした。

構造図の右側領域は、技術を獲得し看護実践能力を高める目的で、【実習の振り返り】によって自己の【成長の実感】を得る実習に焦点を当てたテーマ型ポートフォリオであり、教員による適切な支援を受ける。また、左側領域は、専門職となるためのビジョン・ゴール<sup>3)</sup>を記して【モチベーション】を高め、【思い出・私の宝物】となる実習成果物や思い出の品、私の強みとその変化、私の健康記録などをファイルにしたパーソナル型ポートフォリオであり、先輩からのメッセージや学生による学生のための指南書とガイダンスによって支援される。

今回開発する「実習PF」は、学生が楽しんで実習体験を振り返り、モチベーションを上げることにより、自身が描く将来の姿に向けて自己の成長を実感し、自ら学び続ける力を支えるツールとなることを目指した。そこで、“楽しんで書きたくなる”ように、学生による学生のための指南書や各シートを作成し、それらを含む「実習PF」の名称を『医技Diary～私の成長記録～』とした。

### 4. 「実習PF」の内容

以上の検討を経て、開発した「実習PF」は、最終的に次のシートから構成されることとなった。

#### 1) Sheet1: ビジョン・ゴールシート<sup>3)</sup>

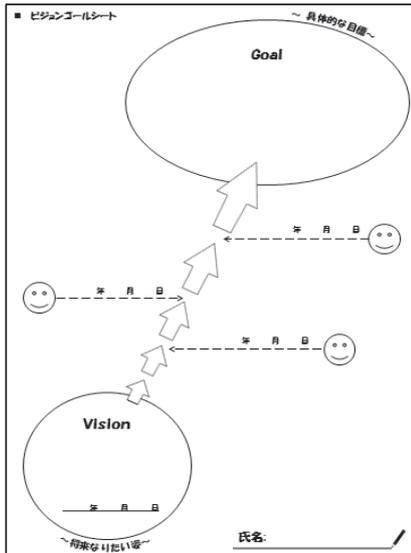
鈴木<sup>3)</sup>が提唱するビジョン・ゴールシートに準じて、実習における自らの目標を明確にするためのシートを作成した(図2)。自分のビジョン(将来なりたい理想の姿)を明確にして、それに向けてのゴール(具体的な行動目標)を立てる。ゴールに到達するまでの長い過程の中で、到達度を評価する機会を設け、自己の成長や変化に合わせてビジョンとゴールを書き換えることができたようにした。

#### 2) Sheet2: 私の歩んだ実習の道

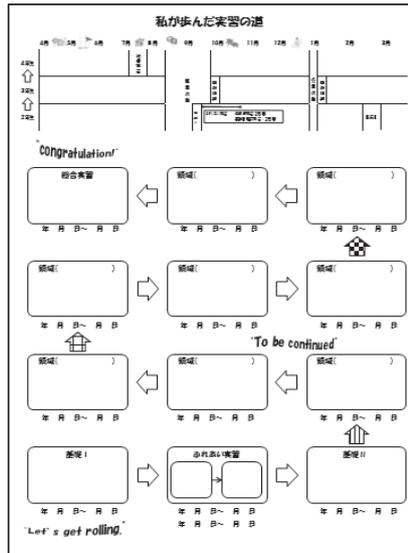
領域別実習は、学生グループによって経験する順が異なり、実習施設も多岐にわたる。このため、4年間の実習スケジュールと領域別実習の進捗状況が、1枚のシートで管理できるように構成した。自分が、いつ、どこの施設で、どのような対象を受け持って実習したのかを自由記述で記載可能、かつ簡便なスタンプラリーシートのような様式である(図2)。

#### 3) Sheet3: My Nursing Road～私の頑張った看護・工夫した看護、印象的だった人たち～

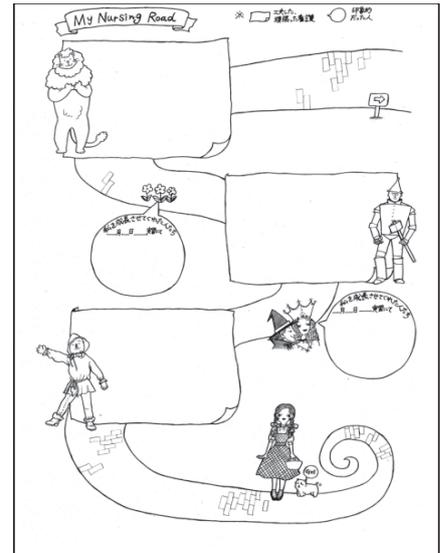
自分が頑張った看護や工夫した看護を振り返り、自分



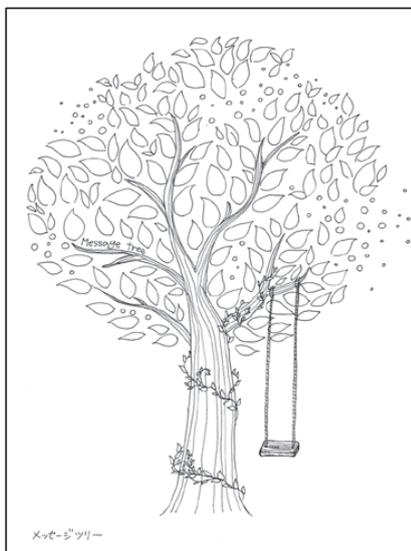
Sheet1



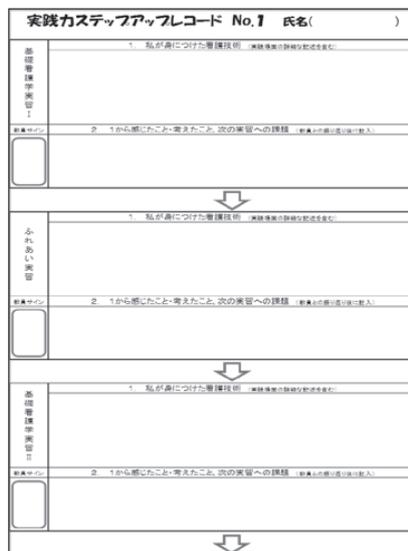
Sheet2



Sheet3



Sheet4



Sheet5『実践カステップアップレコード』



Sheet5『総括シート』

図2 実習ポートフォリオの開発Sheet

に影響を与えた印象的な人たちを書き残すことで、【実習の振り返り】と【成長の実感】を期待した。学生が自ら“My Nursing Road”を歩むことをイメージし、人が歩みを進めるイラストや矢印を使用して自由に記入できるようにした(図2)。吹き出しを付けて、個人情報取り扱いなど注意事項を記載した。

#### 4) Sheet4: メッセージツリー

実習担当の教員や指導者から学生個人へのメッセージを形にして残しておくシートである(図2)。記録に書かれた助言などを抜き出し、メモとして形に残すこともできるようにした。教員や指導者が客観的に見た学生の成長をフィードバックすることによりモチベーションの向上を目指すこととした。

#### 5) Sheet5: 私の看護技術実践

この記録シートは、『看護技術定義表』、『実践カステップアップレコード』、『看護技術実践の自己評価・総括シート』の3種類からなり、現行の『看護技術卒業時到達目標』シートを有効活用するための改善を目指して作成したものである。

『看護技術定義表』は、学生が看護技術の全体像が把握できるように一覧とした。到達目標に関しては、各領域の教員から現在の講義・演習・実習における学習内容の聞き取りをし、到達目標と学習内容が適合するように修正した。「講義・演習で到達できる項目と、実習で到達できる項目を分けてほしい」という意見を基に、各項目の到達目標は、「1: 指導者の助言・指導を受けて単独で実施できる」、「2: 指導者と共に実施できる」、「3: 学内演

習で実施できる]、「4：知識としてわかる」の4段階の基準を設定した。また、技術項目は細目を省き、種類と定義のみ記載した。対象や状況が多岐にわたる技術については、「対象や状況に応じて」と定義し、領域別実習ごとに実習で到達できる項目や細目についてオリエンテーションを実施することとした。

評価時期については、当初、実習終了時毎の評価を検討したが、学生から「毎回の全項目評価は負担であり、継続は難しい」という意見があったため、看護技術を実施した場面を選択し、『実践力ステップアップレコード』に具体的に対象や状況、方法を記述することにより、教員と共有し、振り返ることとした。

『看護技術実践の自己評価・総括シート』は、全領域実習が終了し最終段階である総合実習までの期間に、項目ごとに自己の看護技術到達状況を振り返るものである。看護技術実践に関して良かった点や困難であった点等を具体的に記述し、ピアレビューすることで卒前教育における到達度の確認だけでなく、これからの卒業教育にむけて活かすことを狙いとした。

#### 6) Sheet6：私の強みとその変化

将来の目標を設定する際、自らの強みを知り、目標設定に生かすことは、適切、かつ具体的な目標により近づくことを可能にする。本学は、自身の強みを知るための一つの資料として、平成28年度からPROG調査(Progress Report On Generic skills)<sup>16)</sup>を導入しており、その結果を活用することとした。PROG調査とは、社会人基礎力の変化を客観的に評価することができるものであり、自身の強みや特性を目標に反映し、看護実践力の獲得に生かすことができる。

#### 7) Sheet7：実習成果物・思い出の品

実習で作成した自作の資料やパンフレット、名札などの他、実習中に受け持ち患者から頂いた折り紙や手紙などを入れられるポケットである。実習中に頑張ったことや嬉しかったことを象徴する実物を残すことで【モチベーション】向上に繋げようとするものである。

#### 8) Sheet8：私の健康記録、お楽しみいろいろ

抗体価等の検査結果など、実習時に必要な資料を挟んでおくためのポケットである。また、実習中に撮影した写真を入れるなど、「お楽しみいろいろ」は、仲間と実習を乗り越えてきた軌跡を残すことにより【成長の実感】を得ることに活用することを期待した。

#### 9) Sheet9：実習お役立ちNote(病態生理、薬のノート)

学生の意見をもとに、実習時に頻出する疾患や薬剤の知識を整理、保管し、次の実習でも活用できるように、学習した内容を残せる自由シートを加えた。

#### 10) Sheet10：先輩からのメッセージ

今回プロジェクトに参加した学生4名からの応援メッセージである。既に終了した実習体験を通して感じた思

いや具体的なアドバイスは、実現可能なモデルとなり、学生の【モチベーション】を高めるツールの一つとなることを期待した。

## 5. 活用ガイドの作成

「実習PF」の活用を促進するため、学生の言葉による「実習PF」活用の意義の説明に加えて、実際に記入した例を示しながら各シートの詳細な説明を記載した指南書を作成した。各シートは、個々の学生が自由に記載して自己の成長を確認することを狙いとしているが、配付された「実習PF」のシートの空欄を一見しただけでは記載すべき内容や方法が分かりづらい。そのため、学生が具体的に書いた記入例を示すこととした。

活用ガイドには、次のような内容を記載した。その内容とは、①実習オリエンテーションやまとめ時に『医技Diary』を持参し、実習ごとに書き込み見直す、②強制ではないが、自分のペースで書き込む、③教員に提出する記録は、基本的に「私の看護技術実践」であり、その他は任意とする、④ビジョン・ゴールシート<sup>3)</sup>など、書き込む際に不明点があれば、教員に相談する、⑤『医技Diary』は、有効に活用することにより、自身の成長を教員や他者へ伝えるツールとなる、⑥総合実習前に『医技Diary』を用いて、学生同士でピアレビューを行い、実習で体験したことを共有する、⑦総合実習までの期間に「看護技術実践の自己評価・総括シート」で到達度を確認するなどである。開発したシート以外にも、重要だと思ったことや自分のビジョンやゴールに関係あることを書き込むための「メモ」、プロセスレコード、学習内容、知識や技術を習得するためのポイントや暗記法などの活用方法を追記した。

今年度の初回「実習PF」配布時のガイダンスは、教員が「実習PF」の目的と意義について説明した後、プロジェクトチームの学生が主体となって、各シートの記載方法や学生の視点を生かした活用方法の説明を行った。

## 考 察

### 1. 学生の意見を反映させた「実習PF」

我々は、学生が主体的に活用することによりモチベーションを高め、自己教育力を醸成することに役立つことを目指して「実習PF」の開発に取り組んだ。先行研究<sup>1,5,17)</sup>の多くは、教員主導によるテーマポートフォリオの開発を報告していた。しかし、坂上<sup>5)</sup>は、このように開発されたポートフォリオは、学生の主体的、かつ効果的な活用を促進できていないため、改善に取り組んでいることを報告している。これらの先行研究結果に基づき、今回、教員と学生の協働開発に取り組み、教員のためではなく、学生自らがその価値を見出せる「実習PF」の試作

を目指した。

ポートフォリオの導入においては、活用する学生自身がその目的と意義を理解し、自らがその活用価値を見出すことが重要である<sup>3)</sup>。ポートフォリオ作成の目的は、学生の主体性を尊重し、自己教育力の醸成に資することにある。そのため「実習PF」は、テーマポートフォリオとパーソナルポートフォリオの融合を目指した。テーマポートフォリオは、【実習の振り返り】、【成長の実感】を目的の軸とし、教員の支援を得ながら経験した看護を振り返り、領域別実習を積み重ねるごとに技術評価を統合して実施できるようにした。また、パーソナルポートフォリオには、【モチベーション】、【思い出・私の宝物】の要素を組み込んだ。成果物は象徴する実物を残すことにより自分の実践した成果を実感することができ、学生の意欲向上を支えたと考え、取り入れた。

学生の意欲向上をめざしたパーソナルポートフォリオでは、学生の視点を活かした上級生によるガイダンスや具体的な活用方法を示した指南書、応援メッセージが有効と考えた。坂上ら<sup>5)</sup>によれば、学生同士による支援体制が充実している大学では、ポートフォリオが有効に活用されていることが明らかになっている。実習を経験し乗り越えてきた上級生は、下級生にとって最も身近なモデルとなりうる存在でもある。上級生からの働きかけは、「実習PF」に対する教員からの「与えられ感」を軽減し、学生による学生のための「実習PF」と捉えやすくなり、【モチベーション】の向上へとつながると考えられた。このほか教員や指導者からのメッセージツリーに貼付するカードやコメントを通して、客観的に見た学生の成長や自身が気づかない良さや強みを伝えることは、その人だけの応援メッセージとなり、これもモチベーションの向上に寄与すると考えられた。

## 2. 「実習PF」の継続的活用に向けて

今回の「実習PF」は、学生が主体的に記入することにより成長過程や技術習得の深度の可視化を目指している。この可視化によって全体を俯瞰し、看護学実習における学習の連続性や継続性を意識することが可能になる。領域別実習は、学生個々によって実習領域を経験する時期が異なる。そのため、「実習PF」を作成し、活用することは、学生自身が過去の実習における課題を把握する資料となると共に、実習開始時に看護技術の到達度や学習状況を把握することに役立つ。自己の課題を明らかにして主体的に学習に取り組む力である自己教育力を醸成することに繋がると考える。

しかしながら、坂上ら<sup>5)</sup>は2006年からポートフォリオを導入してきた経験から、学生の主体性だけではポートフォリオの記載や活用は不十分であり、継続的な支援体制が必要であると報告している。よって、看護技術到達

の評価や実践した看護のリフレクションにおいて、教員の継続的、かつ適切な支援が必要不可欠である。学生は教員の支援を受けながら、領域毎に修得すべき技術と修得度を確かめることにより、学生自身の個性が表れた実習課題と目標を明確にできると考える。

また、「実習PF」を学生同士のピアレビューの資料として活かすことで、学生の意欲の向上をもたらす自ら成長するという効果が期待できる<sup>3)</sup>。本学の4年生有志による学生主体のグループミーティング「成長実感体験シェアリング」の試み<sup>18)</sup>では、基礎実習や領域別実習の始めの頃と現在を比較した振り返りが行われ、患者とのコミュニケーションや看護技術の上達に成長を実感している学生の存在が報告されていた。このことから4年次に実施される看護実践能力の到達度評価の際に、「実習PF」を用いたピアレビューによるリフレクションを実施することが効果的と考えられる。

## 3. 本研究の課題

学生が「実習PF」の記載を継続していかなければ、自己教育力を醸成する効果的な活用とはならない。学生が主体的に「実習PF」の作成に取り組めるよう、実習に携わる全看護教員の共通理解と適切な支援が必要であり、学生を支援する体制の整備が急務である。また、共に開発した学生の卒業後、どのように上級生の経験や助言を下級生に引き継ぐか、学生による支援体制についても検討が必要である。さらに今後は、「実習PF」の効果および成果を検証し、看護学科として組織的で、体系的取り組みを継続し、「実習PF」の改善と活用の推進に努める必要がある。

本研究の一部は、プロジェクトチームの看護学科学生4名が卒業研究として公表した。荒巻葉月、福島里奈：看護学生の声を活かした実習ポートフォリオの検討。平成28年度看護研究抄録集、29-30。神野藍梨、宮本翔平：試作ポートフォリオ（医技Diary）に対する看護学生のニーズと活用可能性を探る。平成28年度看護研究抄録集、59-60。

## 引用文献

- 1) 唐澤由美子, 正木治恵, 井上智子, 他 (2003) : 達成事項を記録したポートフォリオ評価. Quality Nursing, 9, (6), 52-59.
- 2) 加藤真紀, 吾郷ゆかり, 吾郷美奈恵, 他 (2005) : 看護教育におけるポートフォリオ活用の文献展望. 島根県立看護短期大学紀要, 11, 99-107.
- 3) 鈴木敏恵 (2007) : ポートフォリオが看護教育を変える! 与えられた学びから意志ある学びへ. 看護教育,

- 48, (1), 10-17.
- 4) 糸賀暢子 (2010): プロジェクト学習・ポートフォリオ評価で学生に身に付く力「学ぶ楽しさ、嬉しさ」を実感する教育への転換. 看護教育, 51, (2), 116-121.
  - 5) 坂上明子, 谷本真理子, 増島麻里子, 他 (2013): 看護実践能力自己評価ポートフォリオの改訂に向けた取り組み. 千葉大学大学院看護学研究科紀要, 35, 15-20.
  - 6) 文部科学省看護学教育の在り方に関する検討会 (2002): 看護学教育の在り方に関する検討会報告 大学における看護実践能力の育成の充実に向けて, 7-19.
  - 7) 文部科学省大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 (2013): 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告 添付資料1 学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標, 21-28.
  - 8) 吾郷美奈恵, 石橋照子, 三島三代子, 他 (2011): 看護基礎教育における自己教育力育成に向けた“だんだんeポートフォリオ”システムの活用. 鳥根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 6, 101-112.
  - 9) 服部紀子, 中村博文, 林さとみ, 他 (2015): 看護学士過程2年次生の自己教育力と看護実践能力との関連. 横浜看護学雑誌, 8 (1), 39-48.
  - 10) 西田慎太郎, 矢野紀子, 青木光子, 他 (2008): 臨地実習における看護技術経験の実態. 愛媛県立医療技術大学紀要, 5, (1), 105-112.
  - 11) 佐野正之 (2010): 教員研修・養成におけるアクション・リサーチ. 教育デザイン研究, 創刊号, 3-12.
  - 12) 文部省中央教育審議会教育内容等小委員会 (1983): 中央教育審議会教育内容等小委員会審議経過報告, 文部時報, 26-43.
  - 13) 浅田豊 (2000): 「新しい学力観」に立つ日本の学校教育におけるポートフォリオ学習の可能性と意義. Quality Nursing, 6, (3), 54-56.
  - 14) 大関信子 (2000): 英国の卒後教育での実際. Quality Nursing, 6, (3), 60-68.
  - 15) 安川仁子 (2007): 看護教育におけるポートフォリオの活用 学習のプロセスを重視した評価. 看護教育, 48, (1), 18-23. -
  - 16) 株式会社リアセック (2016/9/30) PROG: ジェネリックスキルの測定と育成, [http://www.riasec.co.jp/prog\\_hp/generic.html](http://www.riasec.co.jp/prog_hp/generic.html)
  - 17) 深田あきみ, 新橋澄子, 下高原理恵, 他 (2015): 学生のリフレクションを促す経験型実習 主体的に学ぶ力を育成するための取り組み. 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 25, (1), 11-18.
  - 18) 石井宏美, 小椋紘枝, 羽村愛実 (2009): 看護基礎教

育における臨地実習を振り返るグループミーティングの評価 - 4年生による『成長実感体験シェアリング』の試み -. 愛媛県立医療技術大学平成21年度看護研究抄録集, 21-21

## 要 旨

**【研究目的】** 本学の全ての看護学実習を通じて獲得した看護実践能力を可視化し、自己教育力の向上に資するツールとしての「実習ポートフォリオ」を開発することである。

**【研究方法】** 研究デザインは、4年次学生と教員の協働によるアクション・リサーチである。7回の研究会議を開催し、課題の明確化、情報収集と分析、開発するツールの概念枠組みについて検討し、試作品の構造化と改善、実用化に取り組んだ。

**【結果】** 全領域の実習を通して獲得した看護実践能力を、学生自身で可視化することに役立つ「実習ポートフォリオ」を開発した。その構成要素は、「成長の実感」、「実習の振り返り」、「モチベーション」、「思い出・私の宝物」である。活用方法は、実習ガイダンス時に将来なりたい姿を明確化し、各実習前に習得すべき技術や事前学習を計画、各実習終了時に“My Nursing Road”「実践カステップアップレコード」を記載し、体験を振り返り、経験の意味づけを教員の支援を得て行うこととした。

**【考察】** 獲得した看護実践能力の全体を俯瞰し、更なる自己教育力向上に向けて、到達度評価の際に「実習ポートフォリオ」を用いたピアレビューによるリフレクションが効果的と考える。また、「実習ポートフォリオ」の継続的活用には、経験値の高い学生と教員の両者の支援体制の整備が必要である。

## 利益相反

本論文には利益相反に相当する事項はない。